

エミール・ラスクの『判断論』と西田幾多郎

大熊 治生

倉敷芸術科学大学芸術学部

(1999年9月30日 受理)

(前回より続く) 肯定を通して価値が、あるいは否定を通して無価値が (s. 17.) そこに於いて一定の組織構造に割り当てられるところの形成物の正しさと誤りは「判断する思考と決定それ自体とは独立に、この組織構造に対しては価値がふさわしいのか、あるいは無価値がふさわしいのか」ということによって決定されるのである。判断の決定から引き離すことができ、しかもそれと連帯的なそして価値と無価値を与えられたものとして思い浮べられる形成物は、常に、短く言えば、判断の意味として、判断と命題の意味として示され得るのである (註1)。もしもその形成物が判断の決意における直接的な対象を、即ちそこで全体として考えられたものを形成するとすれば、その時にその価値、あるいは無価値がそれに向けられるところの組織構造が、つまりそれについて決定がなされるものとしての判断の決定の基礎が、判断的決定の最初の客体を与えるのである。それらの形成物は、次にまた単に「判断的決定の対象」として示され得るのである。

註1

したがってそれによっては決して判断作用としての判断の意味は、即ち承認や否認という有意味的な運搬者としての行為、主観としての行為は理解されないのである。

つまり対立の根源は、判断論に於いて一般に考えられるよりも一段階後ろにある。判断的態度決定が一般にまず対立を伴うのは、次のことによってではない。即ち態度決定が二者択一的な質の決定と共に、単なる価値中立的な「表象の関連」に向けられる、ということによってではないのである。そして同様に判断的決定から引き離し得る意味は、判断理論のほとんど全てに於いて教えられたように、価値中立的な「素材」に基づくことはないのである。むしろまさに、すでに判断的決定の「素材」や基体の中に潜んでいるものは最初の価値対立であり、判断における質的対立の根源である。それを理解するためにはまさにただ次のことを覚えていることが必要である。それは即ち、判断における一定の組織構造に対してふさわしいと認められる価値の質、あるいは無価値の質と、この組織構造自体にふさわしい質との一致、あるいは不一致が、判断的意味の正しさと誤りに対する尺度を与えるのだ、ということなのである。(s. 18.) 判断的意味のそれぞれの組織構造の中に、肯定的、否定的という二つの価値の確実性が潜んでいる。そのうちの一つが肯定或い

は否定を通して示され、もう一つが、肯定と否定との原初的客体の中に存在する。従って一つの基準を必要とするのは、的中することとか外れることではなくて、判断の意味がそれを必要とするのである。そしてこのような基準に照らせば、意味の正しさと誤りは、態度の適合性や誤りと同様一挙に計ることができるのである。というのは論理的な中というのは判断的決定の客体と一致する意味、即ち正しい意味を思い浮べること、従って当面の組織構造について、正しく決定し、誤りを誤っているものとして決定することに他ならないからである。反対に正しい意味や誤った意味は、適切な態度や、的外れの態度から引き離し得る意味と一致する。

これまでに獲得された結果は次のようなものである。即ち、一对の対立項が存在し、それは判断の意味の正しさや誤りには依存していないし、また同様に、適切な態度や的はずれの態度にも依存していないのであって、むしろ反対に、それに対する尺度や前提をなしでているのでなければならない、ということである。証明の進展はまさに次のようなものであった。つまりまず、一つの組織構造についての決定が、適切な、或いは的はずれの判断的態度を形成する、そして同様にまず一つの組織構造が、自らに分け与えられた価値或いは無価値に取りつかれた状態にあって、そこで判断的意味の本質が成立する、というのであった。判断の中で、それについて決定がなされ、価値の質が与えられ、判断の意味の中に存在する組織構造は、それ自体すでに判断的決定から引き離し得る意味ではありえない。たとえ明らかに、判断が判断についての判断として定義され得ないとしてもそうなのである。(s. 19.) ところで、この原初的な、そして判断的対立から独立的な、そしてその基礎になっている対立、即ち価値と無価値の対立は、判断的決定自体の原初的客体にふさわしいものであり、それに対応して判断的決定の中でふさわしいものとして、その客体に与えられるべきなのであるが、このような対立は〈真理〉と〈真理に反対すること〉との対立として示すことができる。それ故正しい組織構造、誤れる組織構造に対する前提は、真なる組織構造と真理に反する組織構造とを形成する。それらの構造もまた、諸々の要素からなる価値的な全体、つまり「意味」という形成物となるのである。

それ故判断に於いては、それ自体で真なる構造、或いは真理に反する構造の真理と反真理性とが決定されるのである。真理を真理と考えること、そしてまた真理に反するものを真理に反すると考えること、これらのことは正しさを伴うが、真理に反するものを真理と考えたり、真理を真理に反すると考えることは誤りを伴っている。理論的に承認すること、或いは真理と考えることは肯定と呼ばれ、理論的に否認すること、或いは真理に反すると考えることは否定と呼ばれる。それ自体で真である構造を肯定することと、それ自体真理に反する構造の否定は正しさへ至り、反対に、肯定された反真理性と、否定された真理は誤りへ至る。真であるとみなすことにも、真理に反するとみなすことにも正しいものと、誤ったものがある。肯定と否定、或いは真であるとみなすことと、真理に反するとみなすことという対立と、正しいことと誤りという対立、これら二つの対立は互いに交差す

る。二対の対立項が並びあって存立することによって対立の二重性が明らかになる。

従って的中することと的外れなこと、という対立と並んで、意味の二つの対立対がある。つまり、真理と真理に反すること、という対立と、正しいことと誤り、という対立である。

(s. 20.) それにも関わらず、最も重視されるべきなのは、第二の独立的対立対へ導く議論の全体が、価値のある形成物に対してと同様、価値のない形成物にも、まさに適合しているということである。的中と正しさから独立的な真理の価値があるばかりでなく不適当さや誤りから独立した反真理性の無価値もある。それ自体で肯定の価値のある形成物があるのと同様に、それ自体で否定の価値のある形成物がある。誤りから独立的な無価値性や、否定に値することとか言うのは一目で明らかになることはほとんどないのだから誤り場合には先行する普遍的議論を明確に適用することが必要である。誤りが成立するのはやはり常に把握されるべきものの代わりに、なにか他のものが思索の中で思い浮かべられ、そして「誤って」-それと考えられる、というところにあるのだ。しかし虚構や誤りの無価値を生ずるものは任意の混同ではなく、価値的に対立したものの取り違えのみがそうするのである。価値的なものが無価値的なものとして、或いは無価値的なものが価値的なものとして受け取られるのでなければならない。一般に誤りへと至るためにはすでに誤りとは独立的に価値的な形成物と無価値的なそれが互いに交換可能なものとして生じるのでなければならない。まさに考慮されねばならないのは、誤りとは単に、真理からの逸脱とか相違などであるのではないし、また単に恣意的な無価値的な形成物を企むことでもない。無価値的な形成物が価値のあるものと考えられる時、せいぜいそのとき、態度が誤りとなるのである。従って誤りの無価値性は価値対立を前提とするし、それ故誤りと虚偽とから独立的な無価値を前提とするのである。それ故、その無価値とは、無価値的形成物をなんらかの仕方で見み出す主観性、それ自体なのかも知れない。無価値的形成物がどこから由来するかはここではまだ問われない。(s. 21.) 一般に誤るということになるのは、それらの形成物が何らかの仕方では存在し、判断的態度決定に対して他の場所から何らかの仕方では呈示されるのでなければならない、ということ、これで十分である。従ってこの任意な形成物の成立に対して、何らかの仕方では主観性に責任があるとしても、ここで問題なのはただ、それらの形成物がいずれにしても誤りに対して、それに依存しないもの、独立的なものとして存立するということである。それ故それ自体で存立し、誤りから独立的な無価値的意味形成物を認めることは、否定的なものを形而上学的に絶対化することへと至らねばならない、ということをおそれるべきではない。というのは、ここに於いて主観的活動性は、決して無関係なものとして除外されてはならない、ということが確かにすでに暗示されているからである。のちに詳論される理論の中ではじめて示されるのは、この暗示がどのように確かめられるか、またたしかに主観性によって用意された地盤の上にはあるがそれでもやはり有意義的な、それ自体で無価値的な形成物が成立し得るのかという

ことである。

従って否定に価するものは誤りを通して作られたものだ、と考えるというような頑固な習慣がどこへ導くことになるかはまったく問題ではない。むしろ反対に否定に価する形成物の成立が、はじめて誤りを可能にするのである。このことが考慮されず、原初的な無価値が、決定に対して現われるけれど、決定からは独立的な諸対象へとおき移されなかったのであるから、否定に価するような反真理性は、常に誤りの責任にされ、誤りと混同され、それ故対立対の完全に基礎的で不可避的な二重性は見逃されねばならなかったのである。否定すること、真理に反すると考えることが、誤っていると言明すること、或いは偽りであると言明することと同じ意味であって、偽りの判断を拒否することに帰着するという謬見が必然的に成立してしまったのである。しかしもちろん反真理性のそれ自体の否定とか特徴づけは脅迫的な誤りのために生ずることができるのである。(s. 22.) それに対して否定の中でそれについて決定されるもの、そしてその際、無価値として措定されるものそれは誤謬や虚偽ではなく誤謬からは独立的な、反真理性でありそれを誤って真理と取り違えることは避けられねばならない。否定に於いては反真理性はこのようなものとして暴露される。それに関しては誤りが脅かすからである。

しかし単なる無価値の概念に対する普通の満足は、より鋭く完全に循環的なものとして特徴づけられねばならない。虚偽の判断が各々前提とするのは、価値あるものが無価値なものとして、或いは逆に考えられるということである。とにかく虚偽からは独立的な無価値が否認されるならば、誤った態度から引き離し得る虚偽の組織構造があることになる。それに従えば各々の虚偽の判断は、判断についての判断として、しかも誤った判断についてのそれとして解釈されねばならないであろう。しかしそれにも関わらず、各々の虚偽性がそれとの不一致に於いてはじめて成立するところのものは明らかに虚偽性から区別された無価値性でなければならない。虚偽性のみが何度も繰り返し前提とされる、というように虚偽性が把握されてはならない。たしかに無価値とそしてまた、虚偽性も還元不可能なものである。しかしここではそれは全く問題ではなく、むしろ問題なのは、虚偽性が、それとは区別された別の無価値を指し示す、ということが見逃されるということなのである。これを無視することはもちろん一つの循環を行なうことだと言われる。

対立的に分割された意味の組織構造に於いては我々は専ら肯定的な、或いは否定的な判断の正しい意味と偽りの意味のことを考えるのに慣れているから、ここで真の組織構造として、また真理に反するそれとして示されたものを、判断や命題全体の意味と混同しないようにという警告が必要となる。(s. 23.) 真の、そして真理に反する組織構造は確かに判断の意味に対して「素材」として基礎となるものであり、それ故何らかの仕方ですの中に入っていくものである。それ故真なる、または偽なる判断や命題について語られるとすれば、その際真理とか虚偽性とかいうことによって理解されるのは、この論文の術語に従えば、正しさとか虚偽性とか言われねばならないものなのである。そして逆に、次の詳

述の中で真理と反真理性について語られるとすれば常に考えられねばならないことは、判断や命題にふさわしい価値や無価値が問題になるなどということは決してないのだ、ということなのである。それらの価値対立性はこの組織構造をすでに判断的意味の全体として考えるように誘惑することはできない。しかし、もし真理と反真理性とが判断全体の対立へと関連づけられるならば、それはせいぜい肯定と否定によるものだ、ということが出来る。というのは、真理と反真理性とは、肯定に値するものと否定に値するものとのであるか、正しい肯定と否定という客体の相関者であるか、だからである。

それ故判断決定の客体とか、真の、または真理に反する組織構造ということによって考えられるのは、メーメルとゲールラッハにおいては「客観的意味における」判断と命題と名付けられたものであり、ボルツァーノでは「命題自体」、ヘルバルトとJ. ベルクマンに於いては思惟の作用と区別された「考えられたもの」、フッサールに於いては判断の「意味」、或いは「理念的な陳述の意味」、リッケルトに於いては「先験的意味」、ブレンターノ、マーティ、フッサールに於いては「判断内容」、マイノングに於いては「客体的なもの」或いは「判断の対象」、シュトゥンプフに於いては「事情」、H. ゴンベルツに於いては「客体的意味に於いて考えられたもの」、「陳述の内容」、そして「事態」と名付けられたものである（註1）。

註1

ボルツァーノ『学問論1』1837年176頁以下、85、98頁以下。フッサール『論理学研究』たとえばI. 174頁以下、第2章I. その他。ベルクマン『純粹論理学』1879年10頁以下。リッケルト『認識論の二途』『カント研究』1909年27頁以下。マーティ『普遍文法基礎論研究』1908年、219頁以下。マイノング『前提について』1910年、42頁以下。シュトゥンプフ『現象と心理学的機能』『ベルリンアカデミー会報』1907年30頁。ゴンベルツ『世界観の理論』II. 1. 1908年、2頁以下、61頁以下、75、85頁以下。

というのは、ここにおいては一般に命題と判断から引き離し得る意味や判断の決定に於いて、一般に考えられたものや、具体的に念頭に思い浮べられるもの以外は考えられていないからである（註1）。確かに判断決定の原初的客体は主観の作用からと同様、諸対象からも区別された「意味」の領域に属しているが、それは意味全体性としてではなく、むしろ第三章、第二節で示されるように何らかの仕方で組み入れられた要素としてである。それ故原初的客体はたった今挙げられた意味概念や客体概念とは一致しないし——というのはこれらの概念に於いてはすでにあまりにも多くのことが考えられているからであるが——また判断の価値中立的「素材」とも一致しない。というのはそれらの素材に於いては対立的価値性質が欠けているので、再び考えられるのは、あまりにも少しのことにすぎないからである。真の、または真理に反する組織構造ということによって理解されることは——もしも我々が混同から逃れるつもりならば——論理学に於いて習慣となっている概念とは決して同一視され得ない。更にまた最後に指し示されるべきなのは次のことである。即ちこの判断的決定のこの原初的客体は、一やはり同様にある意味で認識の「客体」

を形成するところの一諸対象と一致することはできないということ、これである。諸対象はむしろ更にもう一段階後ろにある。判断の諸客体はすでに対象性という、人為的領域に属するものとして非対象性という深淵によってそれら諸対象から隔てられている。

註1

マイノングは前掲書44頁で「判断される対象」と「それについて判断され判定される対象」とを分けた。しかし、後者の意味での対象はここで主張された意味での判断決定の客体とは一致しない。

(s. 25.) さて、それらの対象が二者択一的なものとして以外には考えられないものであるとしてみよう。その時にはそれら諸対象は、対立から離れた対象と、最も人為的で、すぐ近くにある判断的意味の対立性との間の中間項の位置をしめる(註1)。

註1

一方中間項としての「意味」の領域全体が主観作用と対象との間に現われるのであるが。(ストア派のレクトーン語られたもの—は、meson tou te noematos kai pragmatos 名前とものとの中間項である。Prantl. 『論理学史』I. 1855年416頁 註50参照。)

今では二重の対立対の不可避性に突き当たっている唯一の人はベルクマンであるように見える。その不可避性というのがまた、確かに彼に於いては、単に偶然に現われたものにすぎないとしても、である。「判断とは、それ(表象)の妥当についての決定と結び付けられた表象(賓述)であるという判断の定義は、妥当或いは正当性と非妥当或いは非正当性との対立を単なる表象に結びつけてしまう。この対立は、真理と非真理(虚偽、誤り)という、判断に関わる前提を形成する。というのは疑いもなく、我々がある判断を真であるというのは、判断がそれについて決定するところの表象が妥当性を、或いは判断がそれ(妥当性)に与える理論的価値をもつ時だからである。真なる判断の中に含まれた表象が正しくなく、真実でない判断の中に含まれたそれが正しいことがあり得るのだから、則ち判断が否定的であれば、つまり判断の中に含まれている表象を否認するのであれば、一方に単なる表象に関係のある対立と、また一方に、このようなものとしての判断に関係のある対立を区別することは重要なことであり、それ故それらの対立に別の名前を与えることは適切なことである。それで、ここではやはり、表象は通例「真である」或いは「真でない」と言われるべきではなく、「正しい」或いは「正しくない」と、或いはまた「妥当な」または「妥当でない」といわれるべきである。また判断は「正しい」或いは「正しくない」と言われるべきではなく、「真の」或いは「偽の」と言われるべきなのである(註1)。」

註1

(s. 26.) 『純粹論理学』230頁。176頁も参照。もしここでベルクマンの述語がまさに逆転されるとしてもそれは述語を新しく発明しようという傾向なのではない。完全に言語の慣用に矛盾するのは正当性を判断決定の

客体の中へと、従ってそれによって事象的に先立つものの中へと追いやることであり、また真理を判断決定自体の中へと、従ってそれによって事象的に後なるものの中へと追いやることである。

しかしおそらく arethes 「真」と pseudos 「偽」との対立の必然的二重性に対する洞察への発端は、すでに後代全体を支配する判断理論の中に、つまりアリストテレスの理論の中に見いだされる。第一章第一節に於いてはもう一度そのことについて論じられるだろう。デカルトに於いては、真と偽の対立の二重性は同じものに帰せられてしまうのだが、このことを見いだしたのは、クリスチャンセンであった。彼はまた体系的な意図をもって「真理」の二義性を指示して、それが或る時は「客体の総合」に、また或る時には「判定作用」にふさわしいとしたのである（註2）。しかしいつでもこのような対立対の二重性は、単に偶然に現われるのである。

註2

『デカルトにおける判断』1902年49頁、また68頁も参照。『カント認識理論の批判』I, 1911年119頁。

それ（二重性）が不可避的である、という確信を固めることは、たしかに次の叙述全体に委ねられざるをえない。――

さて今までのところ、序論では *proton pros hemas* 「我々よりも先なるもの」や判断決定について暗示的に述べることによって、事象的に先立つ対立対へと至ったのであるから、その後では叙述はこの場所から、つまり何らかの仕方で構成要素として、判断的意味の究極の形成物へと入っていく客体的組織構造に於いてはじめることができる。第二章はそこから更に上方への道を歩み、そして無対立的領域へと決定的な歩みを進める。そのようにして最高点が到達せられると（s. 27.）第三章は主観性の生起を通して対立が現われるようにするために、いわば下への道を進んでいく。その際第三章は第一節で、原初的対立に到達し、第二節で降下を完成し、判断決定の本来的領域に通じている。

しかし、そもそもそれが先験的論理的諸現象や、諸対象から、一つの距離を通して分けられたところの、対立的構造的形成物の全体的領域へ至るのは、何を通じてかということ、このことはさしあたり、まだ全く曖昧なままであるが、最後の章で初めて明らかにされるであろう。

（以上がラスク『判断論』の序論である。ここで述べられたのは判断の意識作用とその客体、および判断が基づくもの、それらの相互関係の概略である。西田が『場所』の論文でラスクに言及したのも、「超越」が如何にして「内在」に関わるか、という問題意識からであった。我々は次回もラスクの所説を見ていくことにしよう。）

“Die Lehre vom Urteil” (The theory of judgement)
by Emil Lask and the Philosophy of K. Nishida.

Haruo OHKUMA

College of the Arts

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 1999)

We have been studying the relation between the theory of Emil Lask and the philosophy of K. Nishida. We have translated the introduction of his book “Die Lehre vom Urteil ; The theory of judgement”. In this introduction, he described about the relations of our judgement and its object and the base of judgement. How can we say, for example, “It is right.” or “It is wrong.” and where is the base of the “value judgement”?

“Value” is the basic or central conception of the Neo-Kantian School. Emil Lask was one of the last member of the school, but his interest was further reaching, and he referred to our consciousness and the transcendental. Nishida’s interest was also in this point.